

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（文学）	氏名	津坂 貢政
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 中国宋代士大夫の美意識に関する史的研究——書の鑑賞および題跋執筆を事例として——			
論文審査担当者			
主査	准教授	太田	出
審査委員	教授	金子	肇
審査委員	教授	八尾	隆生
審査委員	教授	市來	津由彦
審査委員	教授	須江	隆
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、中国宋代の書の作品に対する鑑賞者の評価を分析の対象として、そこに投影された士大夫の美意識を考察したものである。</p> <p>序論では、「題跋」という史料の性格を解説するとともに、宋代を取り上げる意義について説明する。</p> <p>第一章では、これまで蘇軾・黄庭堅・米芾が如何に能書家としての力量を身につけたかについて言及されてこなかったため、具体的な学書の様相に検討を加えた。学書の要諦は名跡の法帖の観察・臨書であったが、蘇軾らは上質な法書に触れる機会を官職上の特権や人的繋がりの中で得たこと、魏晋期の貴族の書を重視していたことを指摘した。</p> <p>第二章では、書の評価をめぐる美意識が二極化していたことを論ずる。一つは、自身の心の情感の趣に素直に従い、独創的な個性の表明を重視する「外向型」というべき美意識である（蘇軾）。もう一つは、古典の規範に忠実であることを旨とし、心の涵養と自制的秩序を重視する「内向型」と呼ぶべき美意識である（朱熹）。従来の研究では前者のみで宋代の美意識の特徴を論じてきたが、必ずしも適切でなく、対照的な二つの美意識が存在したことを明らかにした。さらに宋代とは後の士大夫が書、ひいては士大夫文化全般を論ずる基本的な参照枠が提示された時代、立ち戻るべき美意識の祖型が形成された時代であったとした。</p> <p>第三章は、第二章の補遺である。朱熹が北宋の蔡襄の書を高く評価したことに着目した。同じく蔡襄を評価した北宋の欧陽修・蘇軾と比較すると、彼らは唐代の書を直接的な憧憬の対象とし、宋代の書は劣ったものであると考えていたが、悲観的な中でも蔡襄を傑出した書人として評価し、行く末を彼に託そうとした。朱熹は、三国魏の鍾繇や東晋の王羲之の書風に好意を持ち、特に後者を江南の六朝文化を象徴する人物として敬い、北半を異民族王朝に奪われた政権に仕えた士大夫として共鳴していた。朱熹は蔡襄の書を三国六朝の書風を継承したのものとして評価したが、そこには自身の美意識が作用していた。</p> <p>第四章では、朱熹が蔡襄の書を高く評価した要因として官人としての功績があったことに目を向けた。蔡襄は北宋の慶曆新政で名を馳せた理想の士大夫であったが、さらに福建という地域社会を通じて共感する点が少なくなかった。蔡襄と朱熹はともに福建を郷里・任地とし、そこに儒教的な生活倫理を扶植しようとした地方官でもあった。二重の地縁による親しみと敬慕の感情こそが、朱熹による蔡襄の書への高い評価を招来する一つの要因であったとする。</p> <p>第五章では、行状や墓誌銘に付された伝記題跋に注目した。朱熹の文集には二十条の伝記題跋が確認でき、①すべて宋人のもの、②題跋の依頼者は概ね朱熹の縁戚や友人・知人ないし門人、③伝記題跋の執筆は朱熹五十歳以降に集中するなどの特徴を有する。かかる事実を踏まえ、伝記自体や朱熹以外の題跋をも並行して分析し、伝記題跋が書かれた当時の政治的・思想的環境を浮き彫りにした。</p> <p>結論では、宋代が士大夫の美意識の価値基準の「型」を生み出した時代であったこと、美意識の価値</p>			

基準が時代の変遷とともに刻々と変化していたことを指摘した。

本論文は「題跋」という難解な史料に取り組み、新事実を発掘し、興味深い議論を展開している。論証には不十分な点が残されていることも否めず、若干の史料補充や修正すべき部分が存在するが、美意識という斬新な切り口から従来の士大夫文化研究を再検討し、歴史学の社会史・文化史・書法史の分野に新たな地平を見出す、今後に大いなる発展性を秘めた力作であるといつてよい。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。